

ひとり公園のベンチで

第2期 OB 内藤 聖一

社会人歴 20 年を前に、会社を立ち上げた。従業員数数千名の鉄道会社、数十名の資産運用会社、数千名の大手金融機関を経て行きついた、たった 1 人の会社だ。主に不動産、株式への投資を行っている。立ち上げから 2 年経った今でも、それまで当たり前のように目にしてきた景色との違いに驚くことがある。

勤め人で賑わう朝の原宿・明治神宮前駅。山手線のホームに向けて一目散に走り去るスーツ姿の男性。スマホを握りながらしかめっ面で歩く若い女性。その脇をすり抜けて、平日の朝は人気の少ない代々木公園へ向かう。ベンチに腰を下ろし、近くのカフェで買ったカフェラテをすすりながら本を読む。周りには小さな子連れの母親、鳩に豆をまくご老人、これが日本のセントラルパークか、と言わんばかりに写真を撮りまくる外国人観光客。元来朝 9 時という時間帯は、オフィスでのメールチェック、顧客からの電話応対や午後の商談に向けた準備など、せわしない時間帯であった。手元の本も、以前ならビジネス書や自己啓発本等であったが、最近手に取るそれは小説等の文学作品の類に変わっている。隠居して老後を悠々自適に過ごすご老人にでもなった気分になる。それでも肩書はれっきとした会社の代表取締役である。公園のベンチで定期的にメールチェックを行う。

「ご所有のマンションの新規賃借人候補です。条件はかくかくしかじか」

「賃料は申し分ありませんが、契約期間は 2 年で交渉してください」

「エヌビディアの決算通過。主力商品である AI 関連の売り上げは概ね好調でしたが、投資家の期待値がそれを上回っており、株式市場における売り口上になっています。お持ちのエヌビディア株のうち半分程度をご売却されてはいかががでしょうか？」

「大統領選挙後のトランプラリーもそろそろ落ち着いてきたようですね。売却は agree ですが、その後の再投資先はどう考えますか？ イーロンマスクが規制緩和を訴える業種が伸びそうなので、その辺りの銘柄を一度レクチャーしてください」

5 分ほどのメールのやり取りののち、スマホを鞆に戻して本を取り出す。最近書店で手に取った「六人の嘘つきな大学生」というタイトルだ。映画化もされたい。以前は決して手に取るような類の本ではなかったのだが、読んでみるとこれがなかなか面白い。著者は伏線の狙撃手、という異名を持っているようで、ちりばめられた伏線を見事に回収する、その作風が評価されているのだそう。確かに見事だなあと読んでみて感心したが、私自身が興味、関心を示した点はそこだけではない。作品背景は 2011 年の就職面接、登場人物は 6 人の大学生。2011 年といえバリーマンショック、世界金融危機後の就職氷河期時代。狭き門を潜り抜けてきた選りすぐりの若者 6 名が、たった 1 つの採用枠を争って、互いに騙しあい、陥れ

あう様を描いている。ああ、こんな感じだったよなあ。自身が経験した、2003年の就職活動、2010年の転職活動は苦しい思い出しかない。数少ない採用枠の中にすべりこもうと、精一杯の背伸びをして、己が他人よりも優れている事をアピールする。面接官は学生の粗探し。エントリーシートで落とされたことも多数あり、その度門前払いをくらった気分だった。圧迫面接なる言葉もよく囁かれたもので、面接官の高圧的な態度に相当精神をすり減らした事をよく覚えている。読み進めるうち、小説の登場人物たちに過去の己の姿を重ね合わせてしまう。2008年に会社を辞め、慶應ビジネススクールに進学（詳細は2008年度、2009年度OB・OG会誌参照）。交換留学のため2009年にはシカゴ大学にも赴いた。はじめのうち、周囲には満面の笑みを浮かべた人材エージェントが多数いた。

「不動産のご経歴と、MBAでファイナンスの知識を磨けば、次は外資系投資ファンドですね！年収は軽く●●万円を超えますよ。次お会いする際は具体的な案件をご用意しますね。」

残念ながら次、をご用意するエージェントは1年近く現れなかった。

「今は不動産や金融セクターが壊滅状態です。第2新卒という枠でもないですし、ご経歴から行くと今はとにかく厳しいですねえ。」

たった1年程度で言う事ががらりと変わってしまった。それ程までにあの金融危機のインパクトは凄まじいものであったのだ。そりゃあ100年に1度と例えられたのだから、当然といえば当然か。厳しいのは分かっている。でも会社を辞めてしまっている手前、こっちも食っていかなければならない。MBAを取っておきながらコンビニバイトをせねばならんのか。そんな空しい気持ちを抱えながら、人気のない公園でただ1人、いつ鳴るとも知れぬ人材エージェントからの連絡に淡い期待をのせ、携帯を握りしめていた自分を昨日のこのように思い出す。

あれから約15年。見える景色が変わった。やることもなく、行く当てもなく、1人ただひたすらにさまよっていた公園は、春だというのに薄暗い水墨画のように見えていた。今日の前に見える代々木公園の紅葉は、燦燦と降り注ぐ朝日に照らされて光り輝いている。ああ、そろそろオフィスに向かわねば。証券会社と打ち合わせののち、投資案件の実査のため築地へ。帰ってからリスク分析を済ませたのち、自分なりの投資レポートをまとめねば。そのあと給与支払い手続きとテナントへの請求書も発行しなければ。朱肉が切れてたから、文房具屋に寄らないと。郵便局は5時までか。そういえば切手が値上がりしたんだっただな。本の続きは...明日西郷山公園にでもいってみるか。